

文化・芸術

「秋の憂—回覧雑誌より」

1911年ごろ、水彩・紙
25・9センチ×17・5センチ

村山槐多 (1896～1919年)

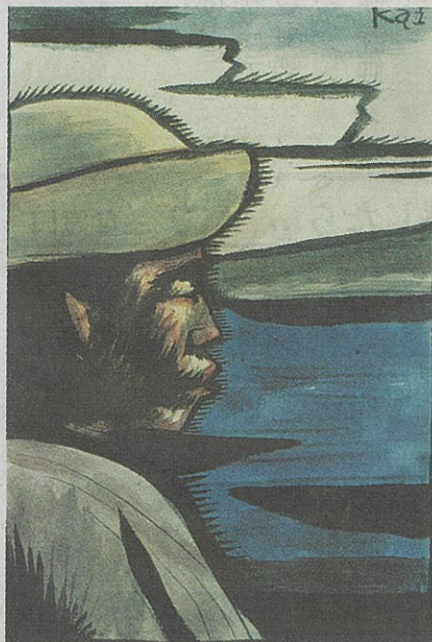
激しい線と色彩に自我を託し、22年という短い生涯を駆け抜けた天折の画家、村山槐多。大正時代のロマン主義とデカダンスに深く共鳴し、少年期から絵画や文芸に類まれな才能を発揮しました。

いとこの洋画家・山本鼎（かなえ）に感化され、槐多は中学校時代、盛んに回覧雑誌を発行しました。回覧雑誌とは、自作の絵画や小説などを仲間同士でとじ合わせ、順番に回し読みをする私的な冊子で、槐多の場合は水彩画や詩などをわら半紙に直接貼り付け、ひもでとじたといいます。

1911年ごろに制作された本作は、槐多が手掛けた回覧雑誌に収録された水彩画の一点です。槐多独特の太く力強い線は、人物や風景の形態、陰影だけでなく、水面を見つめる人物の心の奥底の感情や感傷的な季節の空気をも表すようです。また、その姿は、恋愛や性に思い悩む多感な時期の槐多自身を想像させます。

この作品は、25日からのコレクション展でご覧いただけます。

(佐藤)



《名画の扉》

大川美術館コレクション展から